

小中学校の教育現場で働く、教職員の皆様へ

サポート通信 「つなぐ」

編集：福祉部・こども発達相談センター

第3号



令和元年

7月吉日発行

連絡先 23-7534

7月5日(金)午後5時30分より、こども発達相談センター主催の第1回地域啓発セミナーを開催しました。会場定員である50名ほどの参加をいただきました。勤務時間終了後で大変お疲れのところ、ご参加をいただいたことに、感謝申し上げます。

今回のセミナーでは、こども発達医療センターで、保護者とともに作成している「サポートブック」について、その意図・意義、そして、活用までを事例を挙げながら、3名の専門職員がご説明をしました。

このサポートブックという方式は、臨床心理士がケース対応の中で、保護者とともに作成していたほぼ同形式の支援ツールです。専門相談機関と療育・教育機関とをつなぐ支援ツールとして、全国的にもほぼ定着しているものです。岡崎市の教育相談センターでも臨床心理士が作成しているケースがあります。

●サポートブック作成の出発点は正確な子ども理解、そして、保護者との共通理解で配慮・支援を行う

このサポートブックの導入は、保護者の不安や悩みに寄り添いながら、作成を進めるものです。

出発点は、子どもの実態を正確につかむため、専門家が保護者に寄り添い、子どもの抱える「できなさ」に目が行きがちなところを修正し、子どもの「できるところや好きなところ」にも目を向けながら、作成を進めます。子どもが意識して行動の修正ができることとは別に、どうしてもしてしまう行動の特性やその理解が大切であるというベースづくりです。また、「できるところや好きなところ」には、療育や教育で必要な指導の目標や手立てが隠されています。

今回のセミナーで、『「個別の指導計画」に代わる「サポートブック」の提案がされた』と捉えられる部分がありましたので、その点について説明をします。

●サポートブックの名称

このサポートブックという名称は、いろいろな機関で使用されています。何らかの配慮や支援が必要なケースに対し、作成されるという意義は変わりませんが、作成意図は大きく変わってきます。すべてを網羅できませんが、その作成意図別にいくつかの例を挙げます。

- ① 医療機関や相談機関が保護者とともに作成するサポートブック
 - ㉞ 保護者と専門家が子どもの実態を共有した上で、こどもの成長を促すための支援ツール
 - ㉟ 療育・教育機関に対し、保護者が子どもの実態を理解できるよう説明するための支援ツール
 - ㊱ 日々変化をしていく子どもの状態に対応し、関係機関における支援の変容を記載するツール
- ② 行政単位で作成された、出生から老後までをカバーする関係機関が連携するための「個別の支援ツール」としてのサポートブック(岡崎市で言えば、教育現場のみを対象にした「個別の教育支援計画」)



「サポートブック」として、関係機関が公表しているいくつかの具体例を挙げます。ネットで「サポートブック」を検索し、把握した例です。

- ・入園、入学用の支援ツール
 - ・障害種別に特化した、関係機関が子供の対応について具体的な対応が理解できる支援ツール
 - ・通常学級や特別支援学級で、具体的指導手立ての作成支援ツール
 - ・医療機関受診のための支援ツール
 - ・相談や支援の引継ぎのためのプロフィールブック
 - ・市作成の乳幼児期から就労期まで使えるもの
- 特に、最後の例は多くの市町でそれぞれ独自の形式で作成されています。

●サポートブックは、必ず継続して作成するべきか

今回の地域啓発セミナーには、こども発達センターの対象地域である幸田町の方にもご参加をいただきました。幸田町は、町独自のサポート・ファイル(個別の支援計画)を作成されています。ですから、幸田町の関係者が想定したサポート・ファイルと当セミナーの紹介するサポートブックとは、子どもへの支援ツールとして同じ方向性はあるものの違うものになります。幸田町のサポート・ファイルは、②のサポートブックになります。「今回ご紹介したサポートブックをどのような位置づけで活用していくか?」は、という課題が発生していきます。

また、岡崎市教育関係機関では、「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を市独自で形式を作成しています。よって、当セミナーで紹介の「サポートブック」をどう参考にしていくかという課題が発生します。

こども発達医療センターで保護者と共同作成した「サポートブック」は、専門性の裏付けがあるものの保護者も理解できる内容になっています。ですから、「個別の指導計画」「個別の指導計画」の作成場面で、子どもの実態把握で、保護者との共通理解に活用できます。また、年度ごと「個別の指導計画」の更新でも、「サポートブック」は、保護者との共通理解で大いに活用できると考えます。

そう考えると、こども発達医療センターで保護者と共同作成した「サポートブック」は、保護者主体で学校に持ち込まれるものの、学校がサポートブックを必ず作成しなければならないのではなく、学校も活用できる内容であるということが、お分かりいただけると考えます。

言い換えるなら、「サポートブック」は、療育・教育のベースになる「保護者との信頼関係の成立」に活用できるものになると考えます。

最後になりますが、地域啓発セミナー参加者の皆様から、こども発達相談センターに対する貴重なご意見やご要望も承りました。今後も、教育現場と同一歩調で、子ども支援に向き合っていきたいと考えています。

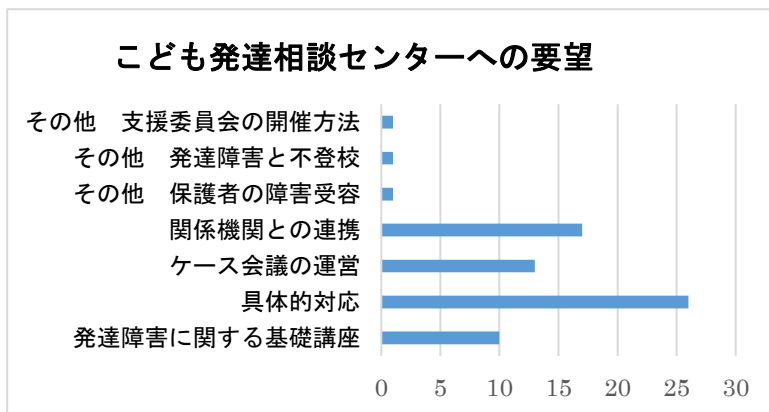
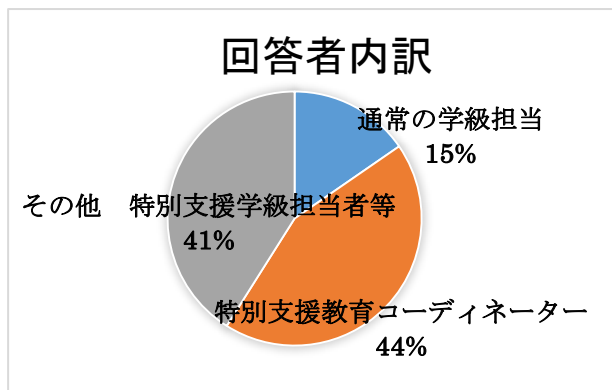
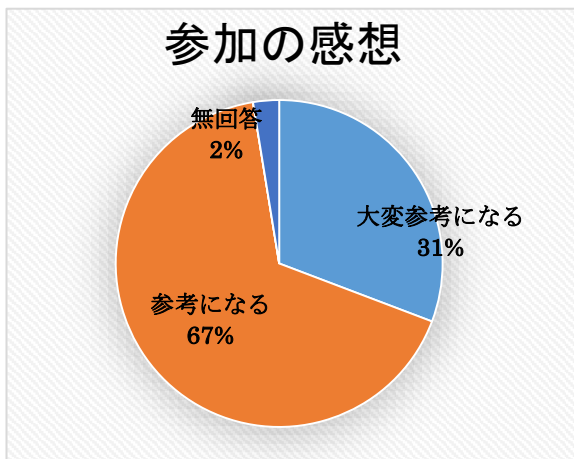


●セミナー参加者のアンケート集計

46名の参加をいただきました。アンケート回答者は39名で、その内訳は右のグラフのようになっています。

アンケート回答者の感想では、98%の方が「大変参考になる、参考になる」との回答をいただきました。

また、今後の期待するセミナーの内容としては、「発達に偏りのある子どもへの具体的対応」「関係機関との連携」「ケース会議の持ち方」の項目への回答が多くありました。次回のセミナー内容の参考にさせていただきます。



◇記述式の項目について

記述部分にも多くの回答をいただきました。記述への回答が必要なものを取り上げます。

【感想】

サポートブックそのものをまだ活用したことがありません。ただ、サポートブックというものが活用できるものだということは知っています。今回はどんな風に活用していくかわかると思いましたが、あまり見えてきませんでした。学校で作っている支援計画は、日常生活にあまり活用できるとは思いませんので、サポートブックが生かされるといいと思いました。更新の仕方が、あまり具体的なイメージとして浮かびません。保護者が書くということが本当の姿なので、学校としてどうして行くか、いい実践例（もう少し具体的な活用法）があったら知りたかったです。

【センターからの提案】

ご指摘のように、岡崎市の「個別的教育支援計画」では「関係機関名の記述」と「機関による支援方針等の若干の記述」になっています。

今回ご説明した「サポートブック」は、「個別の指導計画」作成の際に、非常に有効な資料となると考えます。まず、教育現場で、保護者と子どもの状態像を共有することができるからです。

感想に「更新」についての記述があります。この更新は、子どもの状態像・対応・配慮・支援が変化したとき、保護者との共通理解は更新されるものと考えます。ですから、更新は「個別の指導計画」のベースづくりに欠かせません。ベースづくりは「サポートブック」でなくともよく、「保護者との信頼関係づくりの更新」と考えることができます。その上で、「子どもの良さ、できるところ」をベースにした、子どもの偏りに対し配慮のある「個別の指導計画」が、保護者と共に作成できるのではないのでしょうか。



【要望】

今回のようなセミナーを開催していただけるのだけでもありがたいです。言語聴覚士や臨床心理士の方の話を伺うことができる機会をこれからも作っていただきたい。

【期待するセミナー内容】「具体的対応」と「連携」を希望する。日々、発達障害のある子どもたちと接する中で、困ったときの対応について、自分の引き出しを少しでも増やし、一人一人に合ったやり方を見つけるヒントを得たいと思ったから。関係機関の情報を知り、連携できるようにしたいため。

【センターからの回答】

こども発達センターの機能として、ケース個々への直接支援だけでなく、岡崎・幸田地区における発達障がいに関する地域への啓発活動があります。今回のセミナー開催もこども発達センターが果たすべき機能の一つでした。アンケート結果を参考にし、教育・療育の関係者への啓発活動を展開したいと考えています。

今回は、「教育現場での対応事例」をテーマにセミナー開催を考えています。勤務時間内の開催は出張等の対応でないと参加できない場合がありますので、前回アンケート調査結果を考慮し、金曜日勤務時間終了後の予定です。日程の調整ができ次第、ご案内をします。

発達に偏りのある子どもへの対応について、各種の本が出版され、子どもの状態像からおおよその対応手段が想定ができます。しかし、そのとおりの対応をしても、子どもそれぞれに状態像に違いがあり、なかなか効果を上げにくいケースもあるかと思えます。そんな場合、キーワードは、「指導者の困り感から、子どもの困り感へ」と考えます。子ども理解が対応の出発点になります。

